
亡国姫リリィと駝鳥と桃百合のレイピア

汐崎シオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

亡国姫リリイと駝鳥と桃百合のレイピア

【Nコード】

N3777R

【作者名】

汐崎シオン

【あらすじ】

フレイ大陸で最も堅き鉱石『リルダイン』を採掘できる唯一の島国ゼリア王国。ゼリアはそのリルダインを加工する技術と共に発展し、小国ながら大陸の列強とも互角に渡り合い、平和を維持していた。しかし、突如現れた騎士団『シエル＝ファンドール』によって一夜にしてゼリアは崩壊。国王一家は殺害され、ゼリアの民は失意の中仮面の騎士シエルの圧政に苦しむ。

ゼリアのまだ民は知らない。

王女リリィが生き延び、ゼリアを開放するために立ち上がることにしていることを。

老人とロバ

「トラヌキア帝国領広しと言えども、島国ゼリアには誇れるものが二つある」

馬小屋を照らすランプの明かりにハゲ頭を光らせながら、老人は目の前で人参を食むロバに話しかけた。ロバは老人の言葉に全く関心がないようすで、口の中の人参をゴクリと飲み込むと、涎を垂らしながら野菜と果物が入った樽に頭を突っ込む。

「やれやれ……ロアレンヌや。年寄りの話には耳を傾けるのが礼儀じゃろうが」

ロアレンヌと呼ばれたロバは、面倒くさそうに顔を上げると野菜の汁を撒き散らしながら口先をブルブルと振った。老人は大きな溜息をついて、彼女が自分のローブに飛ばした野菜のカスを指先で弾き落とす。

「それからのう、もっとワシに相応しいレディーとしてのマナーも身に付けて欲しいものじゃ」

老人は優しくロバの頬を撫でた。彼女は、フンと鼻を鳴らして主人に一瞥を投げると、再び樽へと鼻先を突っ込んでボリボリとリンゴを噛み砕いた。

老人は再び溜息をつき、鞆からパイプを取り出すと、慣れた手つきで火を点し、ゆっくりと煙を吐いた。

大きく伸びをして、畜舎の干草に寝転ぶ。

枠が外れた木窓からは桃色の月光が差し込む。

「その二つはの、安くて旨いこのエールサイダーと、この世で最も堅き石、リルダイソじゃ」

老人は左手で藁玉の上に投げ捨ててあった灰色の三角帽子を掴んで深くかぶると、長くて白い自慢のあご髭を撫でた。そして、パイプを燻らせたまま静に目を閉じた。

仮面の騎士

砲撃の煙と、崩れた城壁。

月明かりに照らされた中庭では、乱戦が繰り広げられている。深紅の鎧に身を包んだ一団が仕掛けた突然の夜討に、城の兵士たちは身なりも整えず応戦し、打ち負かされていった。

混戦の中、一人の騎士が地面に落ちていたゼリア兵の剣を拾い上げる。月光に照らされたその刀身は淡い朱色を帯びていた。騎士は不敵に微笑むと、襲い来る兵士達をその剣でいとも簡単になぎ倒してゆく。舞うように戦場を駆けるその様は、薄暗い戦場の中でもその騎士の風貌を更に際立たせていた。

「雑魚に構うな。王の首だけを狙え!!」

女の声。長い金色を返り血で染めながら、彼女は部隊を鼓舞した。顔の上半分を覆う仮面を被り、彼女は鋭い声で指示を下す。

彼女の声に勢い付いた兵士たちは、中庭を瞬く間に制圧すると一気にゼリア城の尖塔を目指す。

(ゼリア王の首さえ取れば……)

彼女は暗闇にそびえる尖塔の頂上へ、鋭い視線を向ける。

不意に塔の小窓が光り、一発の銃声が響く。仮面の騎士は納めていた剣を即座に抜刀し、一閃。銃弾を弾き返した。

彼女は刃こぼれの無い刀身を見やり、指を這わせる。ゼリアでしか採ることができないリルダイン鉱石。この鉱石で作られた武器は正に無敵だった。

(私とリルダインがあれば……)

女騎士は不敵に微笑み、部下の後を追った。

セデウス王の死

セデウス王は怒りを隠そうともせず、執務室の円卓を叩いた。

「なんたる不覚！ もはや籠城しか手は無いのか！！」

「この塔は完全に包囲されております！ 退避用の隠し通路も先程砲撃により遮断されました。この塔に残された兵は我が近衛騎士隊十九名、他の者は全て殺害されました。この手際、内部に内通者がいる事は間違いありません」

隻眼の老騎士レニオが悲壮な声で告げる報告を聞くと、セデウスは目の前にあつた自分の兜を掴み、思いきり壁に投げつけた。その音に王妃ステリアと侍女たちがすくみあがる。

「……………この裏切り、許してなるものか」

王の怒りは収まらず、彼は自分が座っていた椅子を持ちあげると、壁にかけてある自画像に向かって叩きつけた。泣きだす侍女の声に苛立ちを覚えたセデウスだったが、王としての理性が彼を踏みとどまらせた。

「すまぬ……………レニオ、女性達を上階へ」

王とレニオは、うづくまる女性たちを引き起こし尖塔の上階へと続く扉へと歩かせた。王は最後に王妃ステリアに抱擁をし、銀色の髪を撫で、優しくキスをした。何かを言おうとした彼女の唇を指でなぞり、微笑む。

「再びこの地では、約束できぬかもしれぬ。しかし……………」

涙を堪え咳払いをする。声が震えたいた。

「もう一度、そなたを迎えに行く約束しよう……そなたを愛してる」

王はステリアをきつく抱きしめ、もう一度、美しい妻の顔を眺めた。

執務室の窓から、一発の花火が上がるのが見えた。城外から放たれたそれは緑色に輝いて消えた。王は小声で王妃に囁く。

「どうやらテレジアは上手くやってくれたようだ。リリイは城外に逃れた」

王妃ステリアは長身の王を見上げ、一瞬だけ悲壮な表情を和らげて頷いた。セデウスは彼女の頬の涙を拭いてキスをする、ゆっくりと扉を閉めた。

女性たちの足音が遠のくと、セデウスは再び王の顔に戻っていた。

「レニオ、貴殿を含む総員で門の防御にあたれ。それから、もし私が死ぬような事があれば、全員城をすて逃げよ」

「しかし」

王は威厳に満ちた眼差しでレニオの言葉を遮った。

「民の暮らしと命を守るのが王の務め。私にもっとも近い民は、レニオ、お主たちだ」

老騎士レニオは胸の近衛騎士紋章を掴んで王を見つめ返す。

「王よ、主を死なせて尚生きながらえたいと思う家臣など、我が近衛隊にはおりませぬ」

セデウスは老騎士の拳を両手で掴んで優しく包みこんだ。

「それ以上言うな。近衛騎士団長。お主は幼い頃からの私の養育係、そして、唯一の友……私は友人を自分の死に巻き込みたくないのだ。お主が使えるのはゼリア王家だと昔から私に厳しくしていたのはお主であるう……お主にも分かるはずだ。今は生きて、リリイを待つのだ」

レニオは驚いて王を見上げる。

「リリイ様は上におられるのでは？」

王は優しい目で旧友の肩を叩いた。

「彼女はここには居らん。今頃は城下町を疾駆しておるはずだ」

困惑して眉間を押さえるレニオに王は続ける。

「これを知っているのは、私とステリア、侍女長のテレジアとお主だけだ。投降し、生きてリリイを待つ。それが王としての最後の命。受けてくれるなレニオよ。」

「そんな策をめぐらしておいでとは。私にはとても」

王は彼の返事を聞かずに剣を抜くと、両手で握り自らの額に当てる。これは王が騎士に命を授ける儀式であった。

老騎士は涙の貯まった左目で王を見つめ、それからゆっくりとひざまづいた。彼の右肩に王剣が触れる。

「我、ゼリア王セデウス・リルダイン十六世は、汝、隻眼の槍騎士レニオ・ランサートに命ず。汝は命ある限りこのゼリア領に留まり、我がリルダイン王朝の血を引く者の使徒として、その復興に命を捧げよ。汝倒れる時は、その子孫によりこの命を全うする事をここに命じる」

王は最後にレニオの額に口付けをし、儀式を終えた。

「さあ行くがいいレニオ。お主程の槍の名手ならば、必ずや朝日を見る事が出来るであろう」

レニオは王の右手を取り、返礼の口付けをする。

互いが泣いている事は分かっていた。二人は視線を合わさず、そのまま老騎士は尖塔を守る部下達の元へと向かった。王が幼い頃から仕えていた彼には、王の考えが手に取るように理解できた。これから起こる惨事も、全て。

レニオは砲撃で吹き飛ばされそうな門扉の直ぐ手前で守備を固めている近衛騎士達の元へ戻った。

「隊長殿、リルダインの扉も流石に持ち堪えられそうにありません」

部下の報告に頷くと、その場にいる全員を集めて言った。

「一度しか言わぬ。これから何が起ころうと動じてはならぬ。ワシ

が相図をしたら、門を開けよ。各々全力でここを切り抜け、10日後の朝、ゼリア本島の北東にあるルルン島で落ち合おう」

騎士団の一人が口を開けたがレニオはそれを阻止し、続ける。

「決して誰にも洩らしてはならぬ。そしてまた、誰にも見られてはならぬ。よいな」

レニオを囲むように整列していた近衛騎士団は素早く敬礼をする。

「よろしい。リルダイン王朝ゼリア王国近衛騎士団、『シユンツァーガルド』は今宵この場にて解団する。その誇りを胸に、ルルンで会おう」

その時、尖塔の最上階から閃光が走り、大きな爆発音が響いた。大小の瓦礫が降り注ぐ中、レニオは叫んだ。

「今だ。門を開けよ！！ 皆に武運を！！」

開門と共になだれ込んでくる深紅の騎士達と斬り合いながら、彼等は王の名を叫び、一斉に走り出した。レニオはもう一度尖塔を見上げ、敬礼をする。そして、ひらひらと舞い落ちてきたリルダイン王朝の旗を掴むと、槍を手に的中へと飛び込んで消えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3777r/>

亡国姫リリィと駝鳥と桃百合のレイピア

2011年10月5日18時52分発行